



小国両神社の参道沿いの町並み

町並みについて

- ◆同地区は、小国両^{りょう}神社の門前町として古くから賑わい、門前の露天市場の商人達が土着して、現在の上町、下町の町並みを形成したといわれています。江戸期には会所が置かれ、小国地方の政治の中心地として栄えました。
- ◆また、細川藩令により1750年代に杉の挿し木が行われ林業が盛んとなり、木材の産地として発展しました。このため、同地区の町並みには、木材産地の町らしく太い柱や梁により骨組みされた重厚な造りの町屋が残っています。
- ◆現在でも屋号を持つ町屋が残り、町割がわかるなど、小国郷の物資の集散地として商人の町を形成した名残をとどめており、現在も商店街となっています。



町並みの中心(核)となる伝統的建造物

小国両神社

- ◆小国郷の総鎮守とされている両神社であり、小国開拓の祖といわれる高橋宮と火宮の二神が祭られています。
- ◆秋の例大祭は、250年以上続く小国郷最大の祭りです。以前は玖珠、日田、隈府、阿蘇方面より商人が訪れ、祭礼を目当てに一ヶ月以上にわたり市を開いていました。商人達は、その帰路に南小国町の市原などで新たな市を開いたので、同神社は小国郷の賑わいの起点となっていました。



小国両神社の楼門

地区内の宮原一番街商店街には、林業産地の発展とともに営業規模を拡大した旧小国銀行(現阿弥陀杉の館)の建物や、敷地の奥に庭や離れ、蔵がある地域独特の土地利用の形態を今に伝える鶴田医院など、往時の町の繁栄ぶりを今に伝える建物が点在しています。